

パノラマ駅奇譚—Don't forget—

146 東京都市大学 等々力中学・高等学校

半透明の長い屋根の通路を抜けると「不可思議」がいた。脳の底が青くな
った。ホームに 8000 形が止まり、時も止まった。

成城学園前駅屋上庭園のオリーブの庭と雑木林の丘を結ぶ通路ですれ違
った女。灰色のハット、緑の格子柄マフラー、黒のジャケット、ヒップバ
ッグ。五月末には不似合いな装いだ。凄絶な美女。幸福と優しさに満ちた
笑みを湛えていた。

「この庭園、乱歩の『パノラマ島奇譚』を思い出すな」明智先生が言う。

「先生、さっきの人……。六年前、この駅で公開された世田谷一家殺人事
件の犯人再現マネキンと、帽子もマフラーもバッグも同じでした」

「……。」

「なぜ五月にあの格好でこの駅にいるのか。なぜ幸せで優しそうなのか。

誰も気づかないのか。なぜ犯人は…」

「小林君。世は不可思議で満ちている。不可思議とは考えても議論しても
いけないことだ。でも、不可思議に思うことは忘れてはいけない」

8000 形が走り出した。サイレンが聞こえた。